

第十一講 更級日記

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

継母まははなりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもな

どありて、世の中うらめしげにて、外とにわたるとて、五つばかりなる児ちご

どもなどして、「あはれなりつる心のほどなむ、^③忘れむ世あるまじき」な

ど言ひて、梅の木の、つま近くていと大きなるを、「これが花の咲かむをり

は来むよ」と言ひおきてわたりぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思^④

ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか梅咲かな^⑤

む。来むとありしを、^aさやあると、目をかけて待ちわたるに、^⑥花もみな

咲きぬれど、音もせず^c。思ひわびて、花を折りてやる。

A 頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり^⑦

と言ひやりたれば、あはれなることども書きて、

B なほ頼め梅の立ち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり^{⑧⑨}

(注) Bの和歌は、『拾遺集』にある平兼盛の作「わが宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひのほか君が来ませる」によつてゐる。

問一

傍線部①・②・⑥の「に」は、それぞれ次の各文に用いられている「に」のどれと同じ用法であるか。次の(1)～(5)のうちから、それぞれ一つ答えよ。

- (1) 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
- (2) 庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな。
- (3) 命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。
- (4) いかなる心にかあらむ。
- (5) かすみつつおぼろに見ゆる春の夜の月。

①

②

⑥

問二

傍線部③・⑤の「なむ」は、それぞれ次の各文に用いられている「なむ」のどれと同じ用法であるか。次の(1)～(5)のうちから、それぞれ一つ答えよ。

- (1) ただ死を致さむことをのみ思ひけりとなむ。
- (2) いまひとたびの御幸待たなむ。
- (3) われ御子に代りて海に入りなむ。
- (4) 願はくば花のもとにて春死なむ。
- (5) いざ桜われも散りなむ。

③

⑤

問三

傍線部④・⑨の「なり」は、次の(1)～(5)の各文に用いられている「なり」のどれと同じ用法であるか。それぞれ一つ答えよ。

- (1) あやまちは易き所になりて、必ずつかまつることに候。
- (2) 雁の姿も見えて、月明らかなり。
- (3) 秋の野に人待つ虫の声すなり。
- (4) また聞けば、侍従の大納言の御むすめの死に給ひぬなり。
- (5) 男もすなる日記といふもの、女もしてみむとてするなり。

④

⑨

問四 傍線部 a、b、c の語句の意味として最も適当なものを次の中から一つ
ずつ選べ。

- a
- 1 梅が咲くにちがいない。
 - 2 梅が咲くであろう。
 - 3 梅が咲くであろうか。
 - 4 梅が咲いてほしい。

- b
- 1 ほんとうに来るだろうか。
 - 2 そんなことがあるだろうか。
 - 3 そうあってほしい。
 - 4 来るにちがいない。

- c
- 1 静まりかえっている。
 - 2 なんのたよりもない。
 - 3 なにも聞えてこない。
 - 4 何も言ってやらなかった。

問五 傍線部⑦・⑧の「頼め」は、それぞれ次の(1)～(5)のうちのどれに該当するか答えよ。

- (1) 四段活用の動詞の未然形
- (2) 四段活用の動詞の命令形
- (3) 下二段活用の動詞の未然形
- (4) 下二段活用の動詞の連用形
- (5) 下二段活用の動詞の連用形

⑦

⑧

問六 本文中 A「頼めしを」の和歌の解釈で、正しいものはどれか。

- 1 頼みにしていた梅の花は霜枯れて、春がきたというのにまだ咲いてくれない。まだ待ちつづけることになるのか。
- 2 頼みにしていた春は忘れずに来たのに、梅は霜枯れて咲かず、待ちつづけていた人もまだ訪れてこないのか。
- 3 霜枯れていた梅にも春は訪れて花を咲かせたのに、約束したあなたはまだ来ない。まだ待ちつづければならないのか。
- 4 霜枯れていた梅の花も待ったかいあって春とともに花ひらいた。やがてあなたもたずねて来ることであろう。

問七 本文中B「なほ頼め」の和歌の解釈で、正しいものはどれか。

- 1 いつまでもたよりにして待っていらっしやい。梅の立ち枝は、約束して
いない意外な人に対しても同情を寄せてくれるようですから。
- 2 そのまま信じて待っていらっしやい。梅の立ち枝を見ると、約束
していない意外な人をもたずねなくなるそうですから。
- 3 いっそう力にして待っていらっしやい。梅の立ち枝は、約束して
いない意外な人のところにも花を咲かせるものなのですから。
- 4 やはりあてにして待っていらっしやい。梅の立ち枝には、約束し
ていない意外な人でもたずねて来ると言いますから。

問八 A・Bの歌の句切れとして適切なものをそれぞれ次の中から選べ。

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| (1) 初句切れ | (2) 二句切れ | (3) 三句切れ |
| (4) 四句切れ | (5) 句切れなし | |

A

B

第十一講

日記

【平安】

土佐日記 紀貫之 935

最初の仮名日記。日記体による紀行文。

土佐の守(国司)の任期(任命されたのは930年60歳の時、任期は4年)を終えた紀貫之が承平四年1月21日土佐の館を出発し、翌年の935年2月16日に京の自宅に帰り着くまでの55日間の船旅日記。女が書いた形にして仮名文を用いた。文章の中で「あるじ・ある人・船君・父・翁」と出たら作者。冒頭は「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」。任地土佐でなくなった愛児(娘)への悲しみ・船旅への恐怖・帰京の喜びなど。

蜻蛉日記 藤原道綱母

975頃

藤原兼家妻。藤原倫寧女。

最初の女性日記文学。↓苦悩に満ちた21年間の嫉妬が中心の日記

20歳の頃に当時、右兵衛佐であった藤原兼家に見初められ結婚。愛人、町の小路の女、他7人に傾く夫、妻としての苦悩、我が子道綱(スパーマザコン)へのひたむきな愛情。その詳細な心理描写は後の『源氏物語』にも影響を与えた。

和泉式部日記 和泉式部

1007

和泉式部と帥宮敦道親王との恋愛日記を物語的に描いている。

主人公である和泉式部が第三人称(女)で書かれている。基本的に尊敬語が使われていたら、主語は男。敦道親王、謙讓語が使われていたら主語は女。和泉式部。

紫式部日記 紫式部

1010

中宮彰子(上東門院)に仕えた宮廷生活の見聞録。

彰子の土御門殿(道長の邸)での初出産、宮廷の生活や儀式。前半は記録文、後半は消息文(手紙文)。

和泉式部、赤染衛門、清少納言の人物批判。

cf. 彰子の父は藤原道長、夫は一条天皇。

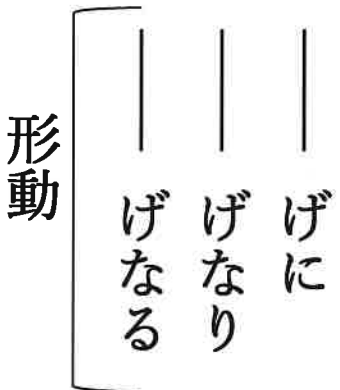
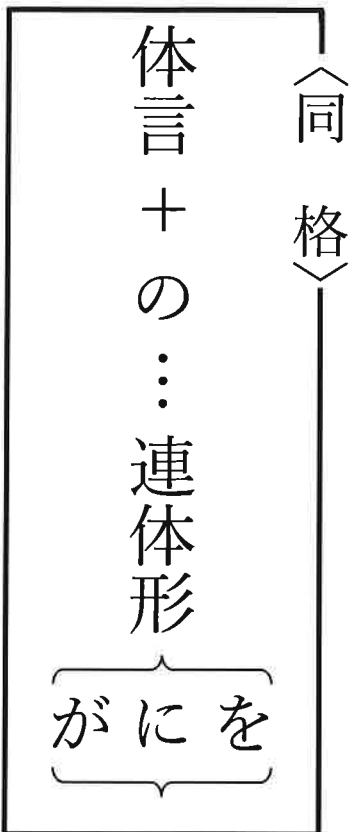
更級日記

菅原孝標女

1058

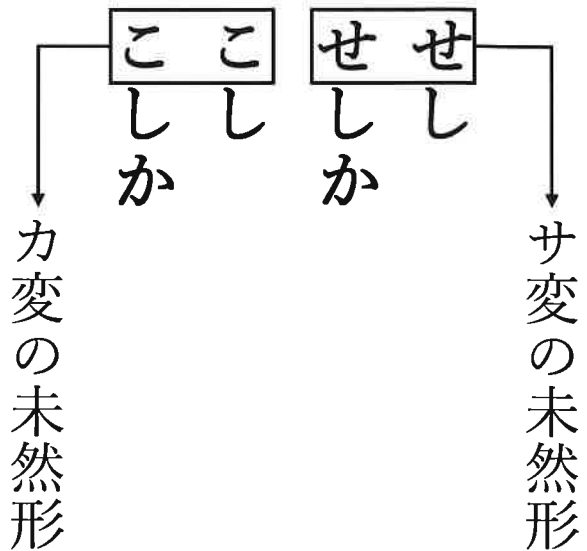
約40年の生涯の回想記録。13歳の時、父の国司の任期が終わり上総(千葉)を出発し上京する旅路、源氏物語を愛読した娘時代の生活、結婚生活、51歳になり夫と死別しさびしい境遇を述べて終わる。

	父	作者
上総国 (千葉県)	48歳	13歳
↓ 12年が経過		
常陸国 (茨城県)	60歳	25歳



- ① 男女(夫婦)の仲
- ② 世間・社会

よのなか【世の中】



をよや

間投助詞

詠嘆を表す（ヨ！ネ！ナア！）

音を泣く↓声に出して泣く
寝を寝 ↓寝る

いつしか

① はやく

② いつのまにか

〈省略〉

とぞ

となむ

とや

とか

とかや

(言ふ)の省略

まれに(聞く)の省略

とこそ——(言へ)の省略

まれに(聞け)の省略

にや

にか



(あらむ)↓(デアルダロウカ・

デアロウカ)

にこそ



(あれ)↓(デアル)

(あらめ)↓(デアルダロウ・

デアロウ)

いさ——打消 (サア?)

いさ知らず

いざ——願望・意志 (サア!)

いざ行かむ

動詞＋わたる

- ① 一面にくする
- ② ずっとくし続ける

わぶ【侘ぶ】

- ① 嘆く
- ② つらく思う
- ③ 困る
- ④ おちぶれる
- ⑤ (補助動詞的に) くできない・くしかねる

やる (こちらから向こうへやる)

- ① 送る・届ける・遣わす
- ② 心をはらす

おこす (向こうから来る)

よこす・届けてくる

たのむ

(四段) 期待する・頼りにする・信用する
(下二段) 期待させる・あてにさせる

なほ

- ① やはり
- ② さらに・もっと

〈句切れ〉

- ① 係結びがある
- ② 終止形がある
- ③ 終助詞がある
- ④ 命令形がある

会話・和歌の中に使われた「けり」は詠嘆

《ハイレベル》

四段・上一段は終止・連体が同形なので伝推か断定か区別できない。そこで前後から意味を決めないといけないが、ここはとりあえず三つ覚えよう！

○ (終止・連体同形) + **なる** + 体言 ↓ 伝聞推定

・ 籠手とかやいふ **なる** 物を(「いふ」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「いふ」)

・ 心恥づかしき人住む **なる** 所にこそあなれ(「住む」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「住む」)

○ 〈音・声〉—— **なり** ↓ 伝聞推定

・ しばしありて、先たかう追う声すれば、殿、参らせ

給ふ **なり** として

○ ぞ・なむ・や・か——同形 **なる** ↓ 伝聞推定(「こそ同形なれ」の「なれ」も伝推)

・ 文箱に入れてありと **なむ** **いふ** **なる**

cf. 形容詞の補助活用の連体形 + なり ↓ 伝聞推定

・ 美しかる **なり** (伝推) ⇄ 美しき **なり** (断定)

※「なり」を伝聞と推定に分けるといふ問題はあまり出ないが、もし出たらこう覚えてくれ。

「なり」の前後の事件(音・声)が近ければ推定・遠ければ伝聞

推定

・秋の野に人待つ虫の声す(なり)

↓近くで虫の声がしている↓近い

(||秋の野に人を待つという松虫の声がしているようだ)

伝聞

・かかる人こそ昔物語もす(なれ)と思ひ出でらる

↓このような人||身近でない・「昔物語」ともある。
ようするに誰かの噂を伝え聞いているわけ↓遠い

(||このような人こそ昔物語をするといふことが思い
出されて)

本文通釈

【まず、復習するときここを軽く読んでおいてよ！ 今日、読んだ場面は、作者が、上総（千葉県）から都へ帰ってきたばかりの出来事で、『更級日記』では、作者の実際の母は生きています。お父さんは上総の国司になったとき、妻問婚していた女性（第二夫人で、作者から見ると継母）と作者と一緒に上総の国へ連れて行った。そしてこの継母は、上総に下るまでは、宮仕え（宮中で、女房としてお仕え）していた。そして、作者と継母はすごく仲がいい。】

（私の）継母であった人は、宮仕えをしていたのが（都から国司の奥さんになって、夫の孝標と地方の上総に）下ったので、思ったのではないことどもなどがあって（Ⅱ考えもしないことどもなどが重なって）、夫婦の仲がうまくいかない状態で、「離婚してよそへ行く」と（言うこと）で、五歳ほどである子どもたちなどを連れて、（継母のセリフ）「しみじみと優しかった、あなた（作者）の心のほどは忘れるようなことは（または、時は）ないだろう（Ⅱないでしょう）」などと行って、梅の木で、軒先に近くてたいそう大きな木を（さして）、（継母のセリフ）「この花が（Ⅱこの梅の花が）咲いたらその時は（または『む』を婉曲でとって、咲くような時は）戻って来よう（と思うよ）」と言いおいて（Ⅱ言い残して）行ってしまったのを、（私は）心の中で継母を「恋しくしみじみと悲しい」と思っては、こっそり泣いてばかりいて、その年も改まってしまった。早く梅が咲いてほしい、（梅の花が咲いたら）「来よう」とあったけれども（Ⅱ言っていたけれども）、「そうあるか（Ⅱ本当に来てくれるだろうか）」と、注目して待ち続けていたのに、花もすっかり咲いてしまったけれど、何の音沙汰もない（または、連絡もない）。思い悩んで、花を折って歌を送る（↓手紙に花をつけて送る。そして、手紙Ⅱ和歌の中に折った花が入っているとオシャレなんだよ）

（梅の花が咲いたらやって来ると、あなたが私を）あてにさせたのに（または、ことを）やはり（Ⅱまだまだずっと）私は待たねばならぬのですか。霜で枯れた梅でさえも春は忘れないのですよ

と言って送ったところ、（継母は私に）しみじみしたことどもを書いて、やはり頼りにしなさい（Ⅱ頼みにしてお待ちなさい）（私は伺えませんが）梅の高く伸びた枝が香るときは、（古歌にもあるように）約束もしていない意外な人も訪れるとかいいますから

（注の引用の和歌）我が家の高く伸びた梅の枝が見えただろうか。思いもかけずあなたが来てくれた